

氏名	江 斐 薫
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文 学
学位授与番号	博甲第2428号
学位授与の日付	平成14年 9月30日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	現代日本語における複文の研究 －時間を表す形式名詞をめぐって－
論文審査委員	教授 下河部 行輝 教授 辻 星児 教授 江口 泰生 助教授 宮崎 和人 神戸女子大学教授 前田 富祺

学位論文内容の要旨

本論文は、形式名詞によって表現される時間従属節が、現代日本語の時間の体系の中でどのような機能をもっているかを明確にすることを目的として、序論、本論、結論から成り立っている。4百字原稿用紙で千二百枚をこえる。

序論は「はじめに」「先行研究」「本研究の目的」「本研究の方法と資料」「本研究の構成」の5項目、本論は、「各形式の考察」「類似形式の比較について」の2項目から成り立ち、それぞれがさらに詳細に分かれている。結論は各項目毎に、まとめをしている。

序において、接続助詞の研究の盛んなのに比較して形式名詞の全体的把握は不十分だとして、先行研究では、工藤真由美(1995)の『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』を踏まえながら、その不十分なところをテンス・アスペクトの基本的な性格に基づいて、それぞれの共通点と相違点を明確にし、形式名詞で表す時間従属節を体系化したいとする。目的では形式名詞「アイダ」「ウチ」「タビ」「シュンカン」「トタン」「アト」「イライ」「アゲク」「スエ」「ケッカ」「マエ」「トキ」等が時間の従属節となっているこれらの機能を明確にすること、方法と資料では、構文の特徴、意味・用法から各形式を考察するが、構文の特徴は、従属度、テンス・アスペクト、前・後件の〔条件付け—条件付けられ〕の観点から考察し、従属度は三上章(1970)、久野日章(1973)、南不二男(1974,1993)、テンス・アスペクトは、言語学研究会・構文論グループ(1985)、形式名詞の接続助詞化は寺村秀夫(1977,1993)を参照する。資料は小説、対談、新聞等の他に作例も日本人のアンケートを基軸に確認しながら行っている。

本論では、「各形式の考察」で、上述したそれぞれの形式の「同時性を表す場合」(一回性と多回性)と「継起性を表す場合」(先行—後続、後続—先行)「同時性と継起性に跨がる場合」(トキニのみ)を考察する。「類似形式の比較について」では「各形式の考察」の結果を踏まえて類似した各形式を比較する。「各形式の考察」は、それぞれの形式を上掲の観点から詳細に例を検討して、各形式を「1 はじめに 2 先行研究 3 構文の特徴 4 形式の意味・用法 5 まとめ」の順で逐一論じている。「類似形式の比較について」では、「同時性を表す場合」で「アイダニ」と「ウチ(ニ)」「継起性を表す場合」で「シュンカン(ニ)」と「トタン(ニ)」,「アゲク(ニ)」と「スエ(ニ)」と「ケッカ」,「アト」と「イライ」「同時性と継起性に跨がる場合」で「トキ」と「アイダ」「ウチ(ニ)」「シュンカン(ニ)」「トタン(ニ)」「アト」「マエ」をそれぞれ比較している。

その結果を各項目毎にまとめて詳細に記述している。

結論では、時間を表す形式名詞全体のまとめとして、構文の特徴（従属度 テンス（前・後件の動詞）・アスペクト（前・後件の動詞、前件と後件の関連）、後件の動詞における実現と未実現、前件と後件における（条件付け—条件付けられ）の関係、形式名詞の接続助詞化について）、形式名詞の意味・用法の順で本論をまとめあげている。

そして、この成果を踏まえて、接続助詞で表す時間従属節との関わりについて今後深く掘り下げていきたいとしている。

論文審査結果の要旨

学位審査会は2002年7月8日、国語学分野から2名、言語学分野から2名、招聘教授1名の5名の構成からなる審査委員によって行われた。審査の結果は以下の通りである。

本論文は従属節における時間の問題を、主として形式名詞について取り扱っているが、従来個々の論述はあるが、全体を体系的な視野に立ったものではなく、その意味においても評価できるものである。さらに、「同時性を表す場合」「継起性を表す場合」「同時性と継起性に跨がる場合」の観点を立てて、それぞれの項目で「アイダニ」と「ウチ（ニ）」、「シュンカン（ニ）」と「トタン（ニ）」、「アゲク（ニ）」と「スエ（ニ）」と「ケッカ」、「アト」と「イライ」そして「トキ」とそれぞれの項目「アイダ」、「ウチ（ニ）」、「シュンカン（ニ）」、「トタン（ニ）」、「アト」、「マエ」とを比較している。時間の類似性を細かに観察して、それらの異同を記述しているのは初めての試みとして十分に評価できるものである。

時間性から形式名詞の従属節を観察しているが、テンスのみならずアスペクトを絡めて総合的に観察することによって、過去・現在・未来・継続という線的な把握だけではなく完了・未完了等、状態性という空間的な把握と相まってそれぞれの項目の異同について一歩進んだ研究となっている。

蒐集した用例が通り一遍のものではなく、小説・対談・新聞・アンケートから出来る限り集めたということは形式名詞の項目数と論文に引用したもの以外の用例も考え合わせるとその努力は十分に評価できる。

従属節の観察で、前件と後件とを（条件付け—条件付けられ）という観察項目を設定したのは画期的なものと評価できる。

一方、審査の過程で指摘された問題があるのは言うまでもないことである。以下それらを述べる。

全項目について観察する条件を同じようにしたのは理解できるがそれぞれの形式にはそれぞれの特徴がある以上形式的過ぎはしないかという指摘がある。そのため重複が感じられのは否めない。各形式に適合する方法の工夫が減されてよかったのではないか。

日本語の用例に対する解釈が場当たりの主観性が見られる場合があるが、作例の引用と合わせてもっと客観的に、言葉足らずにならないように掘り下げが密になるように今後の精進を期待する。

今後接続詞や接続助詞との関わりを深めてそれぞれとの相違を明確にしてほしい。

審査委員会は、以上の事柄を総合的に判断して、本論文を博士の学位論文として認定することについて全員一致で合意した。